

# 学校教育改革に向かう高等学校の現状と課題

—大分県立大分豊府高等学校の取組を通して—

竹中 真希子\*1・有定 裕雅\*2・三次 徳二\*3・市原 靖士\*4・  
落合 弘\*5・三浦 一雄\*6・佐藤 茂\*7・岡 義宏\*8・山田 ゆう子\*9

【要 旨】 「高等学校教育改革」「大学入学者選抜改革」そして「次期学習指導要領に向けた審議」から明らかなように、思考力・判断力・表現力を育成する学習・指導方法の改善は喫緊の課題となっており、学校全体としての組織的な取組が求められている。本研究では、大分県立大分豊府高等学校における「思考力・判断力・表現力を育成するための指導方法の工夫改善についての実践研究」を事例とし、高等学校の授業改善に関係する一連の取組の実態から、本格的な改革を求められる高等学校の教育の在り方について検討する。

【キーワード】 高等学校教育改革 思考力・判断力・表現力 観点別学習状況の評価

## I はじめに

高等学校では、現行学習指導要領（平成 21 年度告示）が全ての学年において開始されて 2 年目となる。現行学習指導要領の教育課程編成の一般方針には、知識基盤社会の到来やグローバル化の進展に伴い、次代を担う人材に求められる資質・能力の育成を目指し、学校教育法改正で示された学力の重要な 3 つの要素（以下、学力の 3 要素）を重視した原則が示されている<sup>1)</sup>。学力の 3 要素は、(1)「基礎的・基本的な知識・技能」、(2)「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等」、(3)「主体的に学習に取り組む態度」であ

---

平成 28 年 10 月 20 日受理

- \*1 たけなか・まきこ 大分大学大学院教育学研究科教職開発専攻教職実践コース
- \*2 ありさだ・ひろまさ 大分大学大学院教育学研究科教職開発専攻学校経営コース
- \*3 みつぎ・とくじ 大分大学教育学部理数教育講座（理科）
- \*4 いちはら・やすし 大分大学教育学部生活・技術教育講座（技術）
- \*5 おちあい・ひろし 大分県立大分豊府高等学校（校長）
- \*6 みうら・かずお 大分県立大分豊府高等学校（教頭）
- \*7 さとう・しげる 大分県立大分豊府高等学校（教頭）
- \*8 おか・よしひろ 大分県立大分豊府高等学校（指導教諭）
- \*9 やまだ・ゆうこ 大分県立大分豊府高等学校（指導教諭）

る。

加えて、平成26年12月に中央教育審議会の高大接続改革に関する答申（中央教育審議会：2014）が、翌年1月にはその実行プランが出された。これを受け、平成27年3月に高大接続システム改革会議（第1回）が設置され、年度末の平成28年3月に「最終報告」（高大接続システム改革会議：2016）がとりまとめられた。この「最終報告」において、高大接続システム改革の一連の3つの改革「高等学校教育改革」「大学教育改革」「大学入学者選抜改革」を実現するための具体的方策が打ち出された。「高等学校教育改革」においては、(1) 育成すべき資質・能力を踏まえた教科・科目等の見直しなどの「教育課程の見直し」、(2) アクティブ・ラーニングの視点からの「学習・指導方法の改善」と教員の養成・採用・研修の改善を通じた「教員の指導力の向上」、(3) 学習評価の在り方の見直しや指導要録の改善などの「多面的な評価の推進」の3つを観点として、改革を推進することが示されている。

また、「大学入学者選抜改革」では「個別大学における入学者選抜改革」「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の導入が示されている。特に後者は平成32年度より実施され、現在の中学2年生が最初に受験することとなる。現行の大学入学センター試験との大きな変更点としては、知識・技能を十分有しているかの評価も行いつつ、「思考力・判断力・表現力」を中心に評価されること、記述式の問題が導入されることが挙げられる。

このように、高等学校教育改革は大学入学者選抜改革の視点からも重要な課題となっている。「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の最初の受験生となる生徒が、2年後には高等学校に入学する。特に、思考力・判断力・表現力を育成する学習・指導方法の改善は喫緊の課題となっており、学校全体としての組織的な取組が求められている。

平成28年8月に、中央教育審議会教育課程部会から『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）』が出された。高等学校では平成29年度改訂、平成34年度入学生から年次進行で実施される予定とされている。改訂の基本方針では、「社会に開かれた教育課程」を実現するための学習指導要領が「学びの地図」となるよう、その枠組みが見直される。また、「学び」の本質として重要となる「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した「アクティブ・ラーニング」の視点から、授業改善の取組を活性化することや、現行学習指導要領改定の答申でも言及された各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実施を促進し、教育課程を軸とした学校教育の改善・充実を目指すことが示されている。

上述の高大接続システム改革における「高等学校教育改革」「大学入学者選抜改革」、そして、「次期学習指導要領に向けた審議」から明らかかなように、これからの高等学校教育には、生徒に育成すべき資質・能力を学校全体で議論し、その育成を期した授業改善・指導力向上、多面的な評価方法の確立、教育課程見直し等の教育改革に速やかに取り組むことが求められている。

そこで本研究では、大分県立大分豊府高等学校（以下、豊府高校）<sup>2)</sup>における「思考力・判断力・表現力を育成するための指導方法の工夫改善についての実践研究」を事例とし、高等学校の授業改善に関係する一連の取組の実態から、本格的な改革を求められる高等学校の教育の在り方について検討する。

## Ⅱ 豊府高校における実践研究の取組の概要

豊府高校では、大分県教育委員会の研究指定を受け「進学力パワーアップ事業」の一環である「思考力・判断力・表現力を育成するための指導方法の工夫改善についての実践研究（以下、「思考力・判断力・表現力育成実践研究」）」を実施している（指定期間：平成 26 年度から 28 年度）。「思考力・判断力・表現力育成実践研究」の趣旨は、平成 21 年度告示の高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえた指導方法と適切な学習評価の在り方について、研究指定校の実践研究をとおして指導方法の改善を図り、生徒の確かな学力の向上を目指すことである。研究指定校においては「生徒の思考力・判断力・表現力の育成や主体的に学習に取り組む態度を養うための指導方法」を追究することが求められている。また、その追究にあたっては、(1)「言語活動を基盤とした生徒の活動を充実させる授業」、(2)「観点別学習状況の評価の適切な運用と、評価結果を踏まえた指導方法の工夫改善」の実施が設定されている。

### 1 研究課題と年次研究内容

#### 1) 研究課題

豊府高校が作成した研究実施計画書には、平成 26 年度から 28 年度までの 3 年間で取り組む課題として、「世界標準の確かな学力の育成」をテーマに「思考力・判断力・表現力の向上を図るため、言語活動を活用した学習指導方法の研究および系統性のある評価規準の作成と評価方法の研究」を設定したことが記されている。ここでの「世界標準の確かな学力」は、「新しい時代を主体的に生きていくため、問題を解決する力やその過程で獲得していく知識や技能、意欲、思考力・判断力・表現力およびそれらをいろいろな場面で活用し、さらに深めたり広げたりしていく力」であるとし、豊府高校の生徒につけたい力として設定されている。

この研究課題の設定の背景として、①普通科進学校である豊府高校においては、従来型の講義中心的な授業が多く見られ生徒が主体的に活動する場面が少なく、言語活動の育成に不十分な面が見られること、②生徒につけたい力の視点が教科によって異なり、指導のねらいに教科ごとのアンバランスが生じていること、③評価規準の設定が不明確で付けたい力の育成に対する評価が十分に円滑に行われていない面が見られるとともに、テストによる「知識・理解」に偏った評価になりがちであることの 3 つの問題とその改善の必要性が認識されていた。これらの問題を受けて、育成すべき資質・能力を生徒につけたい力として明確化し、観点に応じて生徒の学習状況を適切に評価することで学習指導の改善に活かす「指導と評価の一体化」を図る目的において、研究課題が設定された。

#### 2) 年次研究内容

表 1 には、前述の問題を受けて設定された研究課題に迫るために、研究期間において具体的に取り組まれる研究内容を示している。

平成 26 年度の研究開始当初より、観点別学習状況の評価が大きな軸となっている。研究課題設定の背景として認識されていた評価規準が明確になっていないため、豊府高校の生徒につけたい力の視点が教科によって異なり、そのことが教科による学習指導方法のばらつきを生起させている問題を解決する軸として、観点別の評価規準の整備が進められている。

表 1 豊府高校における思考力・判断力・表現力育成実践研究の年次研究内容

1 年次 (H26 年)	<p>思考力・判断力・表現力の向上にむけ「観点」をもとに、既存教科のねらいと育成したい力を明確にし、「評価規準」を研究し作成する。また、授業でそれらの育成したい力を向上させるため、目標を明確にし、言語活動の活用形態や活動領域を考察し、指導方法の研究と授業改善を行う。</p> <p>&lt;学習指導&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・観点別評価規準を明らかにした各教科における言語活動を取り入れた指導の方法と実践</li> </ul> <p>&lt;学習評価&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・観点別学習状況の評価（総括評価を含む）方法の検討・開発</li> <li>・生徒の変容を測る評価方法の検討・開発</li> <li>・観点別学習状況の評価方法の修正</li> </ul>
2 年次 (H26 年)	<p>思考力・判断力・表現力の伸長を観点別評価規準で測り、「指導と評価の一体化」を研究する。さらに、観点別評価規準に則った言語活動を取り入れた質の高い授業や知識活用型の授業の「定着」を図る。</p> <p>&lt;学習指導&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導の目標を観点別に具体的に設定し、学習状況評価と目標の関係を重視した授業改善</li> <li>・知識や技能を応用・統合して活用していくパフォーマンス課題の設定</li> <li>・評価規準と整合性を持った教科年間指導計画の作成</li> </ul> <p>&lt;学習評価&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の変容を測る評価方法の検討・開発</li> <li>・評価問題の開発・検討</li> <li>・観点別学習状況の評価方法の修正</li> </ul>
3 年次 (H26 年)	<p>2年間の研究成果を踏まえて、各教科で獲得した思考力・判断力・表現力を横断的・総合的に活用しながら積み上げると共に、観点別評価規準に則った言語活動を取り入れた質の高い授業や知識活用型の授業の「質の向上」を図る。また、生徒自らが「問題解決」できる組織的な「各教科の横断的指導体制」の構築を研究する。生徒が協力しながら主体的に「問題解決」できる世界標準の学力の定着を評価結果から確認し、3年間の授業実践のまとめや「総合的な学習の時間」の構築を図る。</p> <p>&lt;学習指導&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導の具体的な目標設定と指導、その評価結果を踏まえた効果的であり質の高い指導方法の工夫の改善</li> <li>・各教科の横断的な指導と活用・探究型学力を育成する総合的な学習の時間の構築</li> <li>・年間指導計画に基づく授業実践及び研究成果の検証</li> </ul> <p>&lt;学習評価&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・観点別学習状況の評価の妥当性・信頼性の検証</li> <li>・観点別学習状況の評価方法の修正</li> </ul>

(豊府高校の研究実施計画書 平成 26 年提出版より抜粋)

## 2 研究組織

図 1 には、豊府高校における「思考力・判断力・表現力育成実践研究」の研究組織を示している。豊府高校には校長を委員長として、研究を統括する研究推進委員会とその事務局が設置されている。研究推進委員会では、研究発表など成果公開のマネジメントや有識者 4 名の運営指導委員による指導・評価（運営指導委員会）への対応などを担っている。また、研究推進の実働を担う企画推進部会には、教科統括主任<sup>3)</sup>・教務領域主任<sup>4)</sup>・指導教諭 2 名、教諭 6 名が配置され、研究課題として設定された「思考力・判断力・表現力の向上を図るため、①言語活動を活用した学習指導方法の研究および②系統性のある評価規準の作成と評価方法の研究（丸囲み数字は筆者が追加）」を遂行する体制が敷かれている。この企画推進部会において研究の方向性が確認され、教科主任会議と連携しながら各教員の具体的な研究の取組が行われている。なお、研究を開始した平成 26 年度は教務領域主任が企画推進部会の主担当としての役割を担っていたが、平成 27 年度よりこの研究に特化した「教科統括部」が分掌として位置づけられ、



指標である。これは前章 2 項で研究課題の②として示した部分に該当する。

豊府高校では、平成 26 年 5 月 14 日に大分県教育委員会から「思考力・判断力・表現力育成実践研究」の指定を受け、同月 30 日に研究計画を提出している。企画推進部会が設置され、第 1 回の部会が開催されたのは 6 月 9 日である。平成 26 年度の開催日と主な議題を表 2 に示した。研究スタート当初ということもあり、同月の部会は週 1 回のペースで 4 回開催されている。企画推進部会の開催は平成 26 年度が計 25 回、27 年度もほぼ同様である。

## 1 「つけたい力」の明確化による評価規準の作成

生徒につけたい力の視点が教科によって異なる現状を整理し、学校全体で指導の統一性を図っていくために、平成 26 年度の研究開始当初には、豊府高校の生徒に『『つけたい力』は何か?』についての明確化が進められた。学力の 3 要素や発達段階を考慮しながら、まず、学年ごとの「つけたい力」が協議された後、それぞれの教科で「つけたい力」をまとめるための協議・検討が繰り返された。これらは、観点別に設定された。観点別に「つけたい力」をまとめていく過程を通して、思考力・判断力・表現力育成の評価規準の柱となる、豊府高校の生徒に「つけたい力」（以下「豊府高校生につけたい力」）の像が明確化されていった。

平成 26 年度第 3 回の企画推進委員会では、委員の数名が事前に考えた学年ごとの「つけたい力」の素案をベースにした協議が行われている。第 4 回では学年ごとの「つけたい力」が設定され、それを各教科でどのようにつけていくかという指導方法につながる議論がなされるとともに、どのような観点で評価していくかという評価方法の在り方が検討された。この第 4 回企画推進会議で、各教科で「つけたい力」を明確化するための方針が固められ、教科主任会議

表 2 平成 26 年度の企画推進部会の開催日と主な議題

回	開催日	主な議題
第 1 回	6 月 9 日	研究開発のねらいや方向性の確認
第 2 回	6 月 16 日	年次研究計画、校内研修計画、研究授業計画
第 3 回	6 月 23 日	大分豊府高校生につけたい力の検討（学年ごとのモデルの検討）
第 4 回	6 月 30 日	学年ごとの「つけたい力」の設定、研究計画の共有（研究工程表）
第 5 回	7 月 7 日	各年度の研究の重点化、研究計画の共有
第 6 回	7 月 14 日	「豊府の生徒につけたい力」の協議、今後の研究計画
第 7 回	7 月 22 日	「豊府の生徒につけたい力」のまとめと各教科で「つけたい力」の検討
第 8 回	8 月 25 日	「豊府の生徒につけたい力」と各教科で「つけたい力」の関連性の検討
第 9 回	9 月 1 日	第 1 回研修会、指導案モデルの検討
第 10 回	9 月 16 日	第 1 回研修会、第 2 回研修会、授業観察アドバイスシート、指導案様式
第 11 回	10 月 29 日	第 3 回研修会、第 4 回研修会、単元評価計画モデルの検討
第 12 回	11 月 5 日	第 3 回研修会、第 4 回研修会、単元評価計画様式
第 13 回	11 月 11 日	第 3 回研修会、第 4 回研修会、指導案様式、指導案審議
第 14 回	11 月 17 日	第 3 回研修会、第 4 回研修会、
第 15 回	12 月 2 日	先進校視察寒流報告、第 4 回研修会
第 16 回	12 月 8 日	第 4 回研修会、第 1 回運営指導委員会、指導案修正
第 17 回	12 月 15 日	第 4 回研修会、第 1 回運営指導委員会、
第 18 回	12 月 25 日	第 1 回運営指導委員会の指摘事項のまとめ、アンケート実施、
第 19 回	1 月 14 日	第 1 回運営指導委員会後の取組、アンケート実施
第 20 回	1 月 19 日	ルーブリックの試案、学習状況の評価方法
第 21 回	1 月 26 日	次年度研究計画、ルーブリック、シラバス
第 22 回	2 月 4 日	次年度研究計画、第 1 回運営委員会後の取組、ルーブリック
第 23 回	2 月 12 日	(資料なし)
第 24 回	3 月 6 日	次年度研究計画、来年度の取組、総括的評価について
第 25 回	3 月 17 日	(資料なし)

(豊府高校記録資料より筆者が作成)

を通じて遂行される運びとなった。

各教科での「つきたい力」を明確化するための方針は、まず、その大枠を定め、それを豊府高校の生徒の実態や各教科の学習指導要領と照らし合わせながら、観点別に明文化していくというものである。大枠は、中央教育審議会答申『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について』（平成20年度）の「学習指導要領改訂の基本的な考え方」に改訂のポイントとして示された6項目<sup>5)</sup>のうち、特に重要とされた項目から、「思考力・判断力・表現力育成実践研究」に関わる学力と指導方法の改善に深く作用する3項目に関連づけて、次のように設定された。「生徒の『学ぶ意欲』を喚起し、『知識・技能』を確実に定着させ、『思考力・判断力・表現力』を育成し、『課題発見能力、問題解決能力』を修得させる」というものである。

各教科での「つきたい力」を明文化していく方法は、この大枠を軸にしながら、各教科で(1)学習指導要領に沿って、教科・科目・単元ごとに「つきたい力」を整理し、(2)(1)の大枠に示された①学ぶ意欲、②知識、③技能、④思考力、⑤判断力、⑥表現力、⑦課題発見能力、⑧問題解決能力のどれに該当するのかを確定するというものである。これらは、各教科において「つきたい力」を客観的に評価する観点でもある。当初、思案の拠り所となる「豊府高校生につきたい力」は定まっておらず、大枠から評価の観点が導き出されたため、8つが設定されていたが、その後、国立教育政策研究所が出した『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』（国立教育政策研究所教育課程研究センター：2013）に整理された「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」を元に、各教科の「つきたい力」が踏襲された。「技能」および「知識・理解」については、学力の3要素に合わせて「知識・理解（技能を含む）」に整理されている<sup>6)</sup>。

第6回企画推進部会において、各教科の「つきたい力」が観点別に分類・整理され、「関心・意欲・態度」には、「事象に対する態度、感性を磨こうとする態度、全体的な態度」の3種類があること、「知識・理解」には、「法則から総合・体系、そして活用」という流れがあることが見いだされている。「思考・判断・表現」は3つそれぞれに「つきたい力」が位置づけられた。第6回部会では「豊府高校生につきたい力」の案も作成され、第7回部会において、各教科の「つきたい力」とともにとりまとめられた（表3、表4）。その後年度末までに、各教科において科目ごとの評価規準および単元別の評価規準が作成された。また、企画推進部会では、各授業において観点別の評価規準や評価基準（ルーブリック）を明記する指導案シートと単元評価計画シート（図2）も提案している。

平成27年度からは、「豊府高校生につきたい力」（表3）の育成を目指し、各教科で「つきたい力」（表4）を観点別評価規準とした授業および評価方法改善の取組が試行されている。

## 2 思考力・判断力・表現力を評価するためのテストの試案と試行

平成26年度には、「豊府高校生につきたい力」の設定、各教科の「つきたい力」を科目ごとに作成し、観点別学習状況の評価規準が整備された。これまで、「知識・理解」の評価に偏りがちであった評価の問題へのアプローチとして、平成27年度に思考力・判断力・表現力を評価するためのテストの試案を作成し試行した。

平成 27 年度第 17 回企画推進委員会（11 月 9 日開催）において、思考力・判断力・表現力の観点からの評価を実現するためのテスト試案作成スケジュールが提案されている。このテ

表 3 「豊府高校生につけたい力」

関心・意欲・態度	思考力・判断力・表現力	知識・理解
<b>事象</b>	<b>思考力</b>	<b>法則</b>
社会や文化をはじめ、様々な事象への関心を高め、主体的に考察しようとする態度を身につける。	問題解決において、想像したり、言語や情報、知識や技能、課題探求の技法を活用したりし、多面的・発展的に考え行動をする。	基礎的・基本的な知識・技能・概念が定着する。
<b>感性</b>	<b>判断力</b>	<b>総合・体系</b>
豊かな感受性を育み、他者の考えに共感しようとする態度を身につける。	多様なものの見方・考え方を知り、自分の考えや意見を整理し、他者の主張を適切に判断する。	基礎的・基本的な知識を関連させ体系化し、総合的に理解する。
<b>全体</b>	<b>表現力</b>	<b>活用</b>
発見した課題に対して、自分の考えを深化させ、発展させようとする態度を身につける。	根拠を持って考察した内容を、他者が理解できるように、目的や場に応じて適切に表現する。	総合的に理解した知識の中から必要なものを選択し、活用する。

（豊府高校の平成 27 年度研究実施計画書より抜粋）

表 4 各教科の「つけたい力」

教科	関心・意欲・態度	思考力・判断力・表現力	知識・理解
国語	言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深めようとする。	思考力や創造力を伸ばし、心情を豊かに、理論的に表現することで伝え合う力を高めると共に自分の考えを深化させている。	文章を適切に表現し、的確に理解し、知識を身につけている。
地理歴史	歴史的・地理的事象に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追究するとともに、国際社会において主体的に、責任を果たそうとする。	歴史的・地理的事象から課題を見だし、我が国及び世界形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色を世界的視野に立って多面的・多角的に考察し、国際社会の変化を踏まえて公正に判断して、その過程や結果を適切に表現している。	我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活文化の地域的特色についての基本的な事柄を理解し、その知識を身につけている。また、諸資料を収集し、有用な情報を選択して活用する。
公民	現代社会と人間に関わる事柄に関心を高め、意欲的に課題を追究するとともに、よりよい社会の実現に向けて参加、協力する態度を身につけ、人間としての在り方生き方についての自覚を深めようとする。	現代社会と人間に関わる事柄から課題を見だし、多面的多角的に考察するとともに、社会の変化や様々な考えを踏まえて公正に判断する。追究し考察した過程や結果を適切に表現する。	現代社会の事象と人間の在り方生き方に関わる基本的な事柄を理解し、その知識を身につけている。また諸資料を収集し、有用な情報を選択して活用する。
数学	数学的な事象に対して、主体的に考察しようとする。また、数学の学習活動を通じて、論理的な思考を深化させようとする。	数学の学習活動を通して、多面的な考え方を理解し、発展的に思考できるようになる。また、理論的な思考を数学の学習活動の中で表現できる。	数学の知識を体系化して理解することで、課題を解決する際に適切な知識を選択できる。
理科	日常や科学的な事物・現象に関心や探究心を持ち、観察・実験を通して主体的に探究しようとするとともに、自らの考えを深化・発展させるような科学的態度を身に付ける。	自然科学における事物・現象の中に問題を見だし、探求する過程を通して、事象を科学的に考察し導き出した考えを的確に表現する。	科学的な判断をするために、自然の事物・現象に関する基礎的な概念や原理・法則についての理解を深め、知識を身につける。また実験の技能を習得し結果を整理する方法を身につける。
外国語	海外の社会や文化に関心を持ち、コミュニケーションを図り、自己の考えを深化させようとする。	外国語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝え多面的・発展的に考え行動する。	外国語の学習を通して、言語やその運用についての知識を身につけているとともに、その背景にある文化などを理解している。

（豊府高校の平成 27 年度研究実施計画書より一部教科のみ抜粋）

トは Judgment Expression ability of Thinking の略で、JET テストと呼ばれている。平成 27 年の JET テストの試行は 3 月で、作成スケジュールが提案されたのち、12 月頃から本格的に教科ごとの問題が検討されはじめた。試行対象は 1 年生のみで、教科は公民、英語、数学、国語、理科（生物・物理）である。27 年度は思考力・判断力・表現力に特化した教科別のテスト（JET テスト I 型）、28 年度には合教科型、総合型で思考力・判断力・表現力を評価するテスト（JET テスト II 型）が予定されている。

平成 27 年度に試案作成・試行された JET テスト I 型は、豊府高校で実施しているベネッセの総合学力調査問題や、平成 27 年 12 月 22 日に開催された高大接続システム改革会議（第 9 回）で配付された『「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」で評価すべき能力と記述式問題イメージ例【たたき台】』を参考としながら検討が進められた。また、県内外の高等学校で先行して実施されている思考力・判断力・表現力を評価するテストも参考にされている。特に、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」については、高大接続システム改革会議の「中間まとめ」（平成 27 年 9 月）において、「知識・技能」を基盤として「思考力・判断力・表現力」を中心に評価することが示されたことから、JET テスト I 型の開発においては、前述のたたき台が意識された。JET テストの開発と並行して、ほとんどの教科では定期考査等において、思考力を問う設問を取り入れるとともに、設問ごとに評価の観点（「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「技能」、「知識・理解」）を「問う力」として問題用紙に記載する取組が行われている。

JET テスト I 型は、平成 28 年 3 月に試行された。表 5 には、テストを受けた生徒の事後アンケート結果を示している。JET テスト I 型の難易度について、「大変難しく感じた」、「やや難しく感じた」を合わせると、難しいと感じた順に数学（79%）、理科（物理）（72%）、英語（66%）、理科（生物）（64%）、国語（56%）、公民（34%）であった。評価の妥当性については、ほぼ全ての生徒（96%）が「評価に納得できている」と回答していた。

単元評価計画【 科目名 】

単元								
単元の評価規準								
学習内容	学習活動	時数	評価の観点			評価規準	評価方法	ルーブリック
			関心 意欲 態度	思考 判断 表現	知識 理解			

図 2 単元評価計画シート

表 5 JET テスト I 型後の生徒アンケート結果

(単位：人)

質問		難易度について教えてください。					
教科 (受験者数)		大変難しく 感じた	やや難しく 感じた	普通	やや易しく 感じた	大変易しく 感じた	回答者合計
公民 (265)		16	36	119	61	29	261
英語 (266)		3	4	81	89	82	259
数学 (251)		5	2	47	86	112	252
国語 (256)		4	9	99	93	50	255
理科 (265)	生物	3	10	81	96	69	259
	物理	3	3	65	106	74	251
質問		評価について教えてください。					
		納得できる			納得できない		回答者合計
		246			11		257

(豊府高校の平成 27 年度 JET テスト I 型アンケート集計結果より)

表 6 は、JET テスト I 型を試案・試行した教員が問題分析シートに記載した振り返りから、作問と評価について記された内容を抜き出したものである<sup>7)</sup>。作問についての記述が多く、「新学力対応になる良問であった」などよい面に関するものがあるが、「『つけたい力』を本当に測ることができる作問はやはり難しい」、「従来の模試とは違うので、非常に時間がかかる」、「苦勞の末に作った問題がどれほど生徒の今後に役立つのかという不安」など課題面が認識されている。採点についての記述は少ないものの、「採点基準のぶれを少なくしていく必要がある」、「論述の採点は、中学入試・高校入試や推薦入試の小論文の技術を使って、採点基準を定めたが実際の生徒の答案を見ながら設定したので、本当につけたい力と呼応した採点基準かどうか今後も研究の余地がある」など評価基準に関する課題が認識されていた。一方で「採点基準をあらかじめ詳細に書いていたので採点しやすかった」ということも示されている。その他、「普段から小テストなどでこのようなタイプの問題を作成し、問題や採点、評価の精度を高めていくようにする（作問・評価）」など、今後の取組に必要な事柄も取り上げられていた。

#### IV 実践研究の取組から見えた課題

豊府高校における「思考力・判断力・表現力育成実践研究」の一環である「つけたい力の明確化による観点別学習状況の評価の評価規準の作成」、「思考力・判断力・表現力を評価するためのテストの試案と試行」について、企画推進部会の記録資料から具体的にどのように取り組まれてきたのかを整理した。この整理作業を通して次の課題が見いだされた。

##### (1) 取組と学校教育目標との関連についての明確な追究

平成 27 年度の豊府高校の経営ビジョンには、「創造的な知性と豊かな人間性、逞しさを備え、高い志を持って国際社会でリーダーとして活躍できる人材を育てる」という学校教育目標が立てられている。また、目指す生徒像（教育目標）には、「志高く、主体的に学び、行動する生徒（創造的な知性）」、「世界的視野で思考・判断し、将来、国際社会で活躍できる生徒（高い志）」が含まれている。さらに、教育目標を達成するために掲げられた 5 つの教育方針には、「(1)

表6 JETテストI型の作問と評価に関する教員の意見

作問
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由記述的な論述問題は、「特によいと評価できる」解答がでにくい問題となった。生徒の解答を予想することは難しいと感じた。</li> <li>・思考力を問う作問に挑戦したものの、「つきたい力」と一致しているのか、そのような作問が本当にできたのかと言われると、まだまだ不十分であったという印象が残った。</li> <li>・「つきたい力」を本当に測ることができる作問はやはり難しい。</li> <li>・従来の模試とは違うので、非常に時間がかかる。</li> <li>・苦勞の末に作った問題がどれほど生徒の今後に役立つのかという不安。</li> <li>・オリジナル問題を作る際にきちんと問題として成立させるため、設定や問い方を考えていくと生徒の力をはかる目的から遠ざかって言ってしまう部分もあった。</li> <li>・生徒が解答しやすい問いかけを工夫する必要があることがわかった。</li> <li>・問題の質の善し悪しについては、全国的な動向をみながら、今後も改善の余地はまだあると思う。</li> <li>・平日頃の定期考査や実力考査、対外模試に比して、「現代社会の諸問題」と「教室で学習している内容」を繋げようと努める問題設定をしてみた。</li> <li>・1年次までに修得した知識を活用して「思考」させる作問の難しさを実感した。</li> <li>・新学力の問題を作成するためには、教師側も新聞や政府出版物などを利用して時流を掴み素材を見つける目を養うことが肝要である。</li> <li>・「つきたい力」がついているのか測るのには適切な問題であった。</li> <li>・新学力対応になる良問であった。</li> <li>・普段から小テストなどでこのようなタイプの問題を作成し、問題や採点、評価の精度を高めていくようにする。(評価にも重複記載)</li> </ul>
評価
<ul style="list-style-type: none"> <li>・採点基準のぶれを少なくしていく必要がある。</li> <li>・論述の採点は、中学入試・高校入試や推薦入試の小論文の技術を使って、採点基準を定めたが実際の生徒の答案を見ながら設定したので、本当につきたい力と呼応した採点基準かどうか今後も研究の余地がある。</li> <li>・5段階評価の基準がわかりづらく、生徒に説明しづらい。</li> <li>・採点基準をあらかじめ詳細に書いていたので採点しやすかった。</li> <li>・普段から小テストなどでこのようなタイプの問題を作成し、問題や採点、評価の精度を高めていくようにする。(作問にも重複記載)</li> </ul>

(JETテストI型問題分析シートより抜粋)

世界的視野に立った高い志を立て、その実現に資するため、確かな学力・豊かな心・健やかな体の向上をさせ、21世紀を主体的に生きる力を育む、「(3)言語活動の充実、ICT機器の活用、学校図書館の活用等により生徒が能動的に学習する指導を徹底し、基礎基本の徹底、思考力・判断力・表現力の向上、学ぶ意欲を育む」と示されており、「思考力・判断力・表現力育成実践研究」の取組は、学校経営ビジョンにしっかりと位置付けられている。

「思考力・判断力・表現力育成実践研究」の研究計画書には3年間で取り組む課題として、「世界標準の確かな学力の育成」をテーマに「思考力・判断力・表現力の向上を図るため、言語活動を活用した学習指導方法の研究および系統性のある評価規準の作成と評価方法の研究」と明記されている。また、「世界標準の確かな学力」は、「新しい時代を主体的に生きていくため、問題を解決する力やその過程で獲得していく知識や技能、意欲、思考力・判断力・表現力およびそれらをいろいろな場面で活用し、さらに深めたり広げたりしていく力」であるとし、豊府高校の生徒につきたい力として設定されている。

このように、一見すれば、研究は学校教育目標としっかりと結びついているように思える。しかしながら、それは一方向的であり双方向にはなっていない面が見られる。各教科の「つきたい力」から「豊府高校生につきたい力」を見てみると、各教科の「つきたい力」の設定はま

だ十分ではなく、改善すべき点が見受けられる。各教科の「つきたい力」を明文化し始めた当初、「豊府高校生につきたい力」は定まっておらず、文部科学省や国立教育政策研究所が発行した資料を手がかりとして、思案されたことも影響していると推察される。

学校教育目標は、学校における日々の教育の営みの中に具現化されることで、達成が目指される。学校教育目標を効果的に実現していくには、教師集団の中でその意味するところを共有化し、日常の教育実践の中で意識することが重要である（佐藤・浦野：2015）。「思考力・判断力・表現力育成実践研究」の取組を実際に進めて行く過程においてはそれぞれの取組が最終的に目指すもの、向かう先として学校教育目標を見据えるという機能が十分には働いていない。それぞれの取組が学校教育目標を明確に追究できる機能を備えることで、「思考力・判断力・表現力育成実践研究」の精度と信頼性は格段に向上する。

## (2) 評価規準や評価基準の妥当性を検証する仕組み

学習評価は、評価結果が評価の対象である資質・能力を適切に反映させて行われるものである。評価の妥当性を確保するためには、まず、学習指導要領に基づいた学習指導目標が明確で、目標を実現するための適切な内容が設定されている必要がある。また、学習指導目標をどの程度実現できているかを適切に評価する方法が設定されている必要がある。その上で、学習指導の目標および内容と対応した評価基準が設定されなくてはならない。すなわち、評価基準の設定にあたっては、学習指導目標と適切な学習内容に基づいていることが不可欠である。また、この評価基準は、各教科の評価規準、各単元の評価規準と整合することも不可欠である。これらの要件を検証する仕組みがあって、はじめて評価規準や評価基準の妥当性が確保される。学習内容は学習指導目標を実現できるものとなっているのか、目標をどの程度実現できたかを評価する方法は適切であるのか、学習指導目標と評価基準に整合性があるのかなどを検証する仕組みである。

「思考力・判断力・表現力育成実践研究」では、学習指導要領の目標に沿った各教科の「つきたい力」が設定された。また、「つきたい力」に沿って単元別の評価規準が設定され、授業改善のための指導案シートには、観点別に科目の「つきたい力」、単元の評価規準、評価の方法が明示されるようになっていく。さらに、評価についての詳細を記す単元評価計画シートも作成されている。しかしながら、豊府高校の取組においてこれらが適切になされたかの検証は先述のどの要件においても行われていない。実際にJETテストI型では、教員自身が作問や評価において、本当に「つきたい力」に対応しているのかという困惑を示している。

この課題は、豊府高校の「思考力・判断力・表現力育成実践研究」だけのものではなく、教育を営む全ての機関に共通するものである。観点別学習状況の評価の規準を各教科、単元ごとに定め、実際の評価基準を作成する作業は、非常に多くの行程を要し手間も時間もかかる。一通りの作成を終えた後に一から妥当性を検証しては、全ての行程を溯る事になり効率的とは言えない。

それぞれの評価規準や評価基準を作成するためには、それぞれの学習指導目標、学習内容、評価方法などを分析しなくてはならない。多くの場合、分析を進める際に従事者が思考と判断を繰り返して吟味に吟味を重ねても、目に見えるのはできあがったものだけとなる。分析の際に思考したこと、判断したこと、吟味したことなど根拠となる部分が可視化されることは少ない。これらが可視化されることで、できあがった評価規準や評価基準の妥当性の検証が効率的になるだけでなく、検証の精度が上がり妥当性の確保につながると考えられる。

### (3) 企画推進部会における研究自体の分析や省察の機会の設定

ここに挙げる課題は、本研究で具体的に取り上げた2つの取組の実態から見えたものではなく、2つの取組の具体を紐解くために、企画推進部会などの記録資料を整理する中で見えたものである。しかしながら、学校現場において取り組まれている様々な「研究」に共通する課題でもあり、「思考力・判断力・表現力育成実践研究」の質を向上させるのみならず、教員一人一人の資質能力の向上につながる重要な要素を含んでいる。

豊府高校における「思考力・判断力・表現力育成実践研究」は、授業における指導方法の改善とその改善を実現するための重要な指標となる評価規準の整備を大きな柱として進行している。本論では、「思考力・判断力・表現力育成実践研究」の土台となる評価規準の整備に関する取組について焦点をあて詳述してきたが、指導方法の改善に関する取組、すなわち、授業改善への取組も同時に進行されている。指導方法の具体的な検討・改善を学校全体の全教科で進めるための計画、改善を促進するための校内研修会、研究成果発表会の企画・運営など、企画推進部会が担う業務は多数ある。企画推進部会は第2章に示したとおり、月2回のペースで開催されている。当然のことながら、企画推進部会のメンバーは日々の業務をこなしながら、「思考力・判断力・表現力育成実践研究」の中心的役割を担っている。

学校現場で取り組まれる研究は、日々の教育の営みに直結するものではあるが（あるべきであるが）、多忙極まる教員の職務においては、教育活動に生きて働く成果となりにくいのが現状である。その理由は、多忙極まる中で研究を前進させること、決まった計画を進めることに目が向きがちになり、取組後の省察が十分にその取組自体の質を向上させるに至っていないこと、携わった教員の資質能力の向上に寄与するレベルに達していないことである。「思考力・判断力・表現力育成実践研究」においても、取り組んだ内容について研究的視点からの十分な分析はなされておらず、研究自体を俯瞰するために振り返る機会は設定されていない。

学校現場で取り組まれる授業研究を代表とする校内研修や研究が打ち上げ花火のように単発的であること、教員自身の自己の成長の実感につながっていないことは、これまでも指摘されている（e.g., 佐伯・藤田・佐藤：2004, 佐藤：2015 など）。学校現場で取り組まれるどの研究においても、研究自体を俯瞰し、それが教員の資質能力、学校の教育力にどう寄与するのかという原点に立ち返ることが重要である。学校現場で取り組まれる研究の質を向上させる力は、これからの時代の教員に求められる資質能力（中央教育審議会：2015）でもあるともいえる。

## V おわりに

本論では、豊府高校が大分県教育委員会の研究指定を受けて取り組んでいる「思考力・判断力・表現力育成実践研究」の一連の取組の中から、授業における指導方法の改善の重要な指標となる評価規準としての「つけたい力の明確化による観点別学習状況の評価の評価規準の作成」、評価方法である「思考力・判断力・表現力を評価するためのテストの試案と試行」の実態を見てきた。

豊府高校では管理職のリーダーシップの下、教科統括主任、教務領域主任そして教科主任等のミドルリーダーが中心となり、全教員が情熱を持ち研究に取り組んでいる。高等学校は全日制・定時制・通信制の3つの課程、普通科・専門学科・総合学科の3つの学科があるほか、単

独の学科のみからなる単独校と複数の学科を有す総合高校など様々な学校がある。教科の指導内容も多岐にわたり、一律の指導方法を構築することは困難である。そのため、高等学校では「他教科のことはわからない」、「他教科の指導に口を出すべきではない」という傾向がみられ、これまで多くの授業改善の取組は教員個々のもので終わってしまいがちであった。また、高等学校は進学や就職という進路保証、それに付随する資格取得等が求められ、その実績により学校が評価されるという要素を持つ。

豊府高校のようにすべての教科において学校全体で授業改善に取り組んでいる例は全国でも珍しい。「こういう授業をしていて進捗は大丈夫ですか?」、「学力は落ちませんか?」というのが、豊府高校の公開授業を見た他校の教員が発する素朴な問いかけである。このような状況下で豊府高校は学校を上げて授業改善の取組に着手している。その原動力は「生徒一人一人の夢をかなえてやりたい」という教員の「想い」である。全教員が情熱をもち、失敗を恐れず行動する「熱意」である。

「はじめに」で述べたように、今、高等学校は本格的な改革を求められている。次代を担う人材に求められる資質・能力の育成の責務を背負い、改革を実現させる必要性に迫られている。学校教育改革においては、その観点とされている「教育課程の見直し」、「学習・指導方法の改善、教員の指導力向上」、「多面的な評価の推進」の3つが独立に進行するのではなく、互いに補完しあいながら、一体的に進められていくことが重要である。

前章で指摘してきた課題を改善し、豊府高校の研究を質的深化させることが、授業改善を通じた学校教育改革の効率的で精度の高い1つのモデルを示すことにつながる。

今後は、「思考力・判断力・表現力育成実践研究」で取り組まれた、「授業における指導方法の具体的な改善」や「校内研修会」についても俯瞰し、より質の高い実践研究を追究するための指標について検討する。

## 注

- 1) 学力の重要な3つの要素については、学校教育法第30条第2項(第62条の規定により高等学校に準用される)で規定された「前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」に示されたものである。
- 2) 大分県立大分豊府高等学校は、昭和61年度開校、平成19年度に大分県立大分豊府中学校が設置され、県内の公立学校では唯一の併設型中高一貫教育校である。
- 3) 教科統括主任は、平成27年度に新たに新設された豊府高校独自の部署の主任で、教科主任会議を主宰し、組織的な授業改善及び教師の指導力向上を図る業務を担当する。
- 4) 教務領域主任は、平成26年度の分掌再編に伴い設置された主任で、教育課程の編成、教科書採択、学習指導、成績処理、入学者選抜、教育のICT化、図書館活用等を担当する。
- 5) 6つの項目とは、①「生きる力」という理念の共有、②基礎的・基本的な知識・技能の習得、③思考力・判断力・表現力等の育成、④確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保、⑤学習意欲の向上や学習習慣の確立、⑥豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実である。これらが改訂のポイントとして示され、その中でも特に②を基盤とした③、⑤及び⑥が重要であるとされた。
- 6) 検討時の資料として、中央教育審議会の教育課程部会が平成22年度に公表した『児童生徒の学

習評価の在り方について（報告）』から、「学力の要素と評価の観点」を整理した図が作成されている。

- 7) 問題分析シートには、①全体の分布から見る生徒の態度に合わせた問題設定の適切さや問題の質等について、②1～5の各段階の評価が表す意味について、③分布や生徒の答案の見取りから分かったこと・気づいたことと、「つきたい力」が着いているのかの評価について、④今回の JET テスト I 型の成果について、⑤今回の JET テスト I 型の課題について、⑥次年度への申し送り事項について（問題・解説作成・採点・評価等について）、⑦その他の記載欄がある。作問と評価についての記述があれば、記載欄を問わず抽出した。

## 引用・参考文献

- 大分県立大分豊府高等学校企画推進部会（2015）平成 27 年度企画推進部会（記録資料）。
- 大分県立大分豊府高等学校（2015）思考力・判断力・表現力育成研究平成 27 年度（記録資料）。
- 大分県立大分豊府高等学校（2015）平成 27 年度研究指定中間発表会（記録資料）。
- 大分県立大分豊府高等学校（2014）思考力・判断力・表現力育成研究平成 26 年度（記録資料）。
- 大分県立大分豊府高等学校（2014）平成 26 年度研究指定第 1 回運営指導委員会（記録資料）。
- 高大接続システム改革会議（2016）高大接続システム改革会議「最終報告」。（URL：[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232\\_01\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf)）[最終アクセス日：2016 年 10 月 16 日]
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター（2013）評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料～新しい学習指導要領を踏まえた生徒一人一人の学習の確実な定着に向けて～高等学校「共通教科」。（URL：<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryoku.html>）[最終アクセス日：2016 年 10 月 16 日]
- 佐伯胖・藤田英典・佐藤学編（1996）学び合う共同体。東京大学出版会。
- 佐藤学（2015）専門家として教師を育てる—教師教育改革のグランドデザイン。岩波書店。
- 佐藤光咲・浦野弘（2015）学校教育目標の設定とその教育課程へ具現化の事例—秋田における事例を通して—。秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，第 37 号，pp.247-253。
- 中央教育審議会（2016）次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）。（URL：[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1377051.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1377051.htm)）[最終アクセス日：2016 年 10 月 16 日]
- 中央教育審議会（2015）これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）。（URL：[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf)）[最終アクセス日：2016 年 10 月 16 日]
- 中央教育審議会（2014）新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育，大学教育，大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ，未来に花開かせるために～（答申）。（URL：[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf)）[最終アクセス日：2016 年 10 月 16 日]
- 中央教育審議会（2010）児童生徒の学習評価の在り方について（報告）。（URL：[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1292163.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1292163.htm)）[最終アクセス日：2016 年 10 月 16 日]
- 中央教育審議会（2008）幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）。（URL：[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1216828.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1216828.htm)）[最終アクセス日：2016 年 10 月 16 日]
- 東京都教育庁指導部（2012）適正で信頼される評価の推進に向けて。（URL：<http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/buka/shidou/hyouka.html>。）[最終アクセス日：2016 年 10 月 16 日]

## Current Conditions and Issues at a High School Requiring School Educational Reform

—Through a Study that is Carried Out at OITA HOFU High School—

TAKENAKA, M., ARISADA, H., MITSUGI, T., ICHIHARA, Y., OCHIAI, H.,  
MIURA, K., SATO, S., OKA, Y. and YAMADA, Y.

### Abstract

The purpose of this study is to indicate the current status and issues of a high school with a view to school educational reform using the case of Oita Hofu high school. The school is engaged in the improvement of lessons for fostering student's thinking, judgment, and expression skills. In this paper, we describe the two improvements that were addressed in the school. (1) Preparation of standards for the criterion-referenced assessment to determine the degree to which learning objectives are realized, (2) A test for measuring thinking, judgment, and expression skills. Then, aspects of high school education which need reform will be discussed.

**【Key words】** High school educational reform, Thinking, judgment, and expression skills, Criterion-referenced assessment to determine the degree of to which learning objectives are realized